The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代モンゴル語における反義語の研究
Author(s)	金, 書包
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/74
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【8】

氏　　名	金（キン）　書（ショ）　包（ホウ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２３２３３　号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**現代モンゴル語における反義語の研究**
論文審査委員	（主査） 准教授　塩谷　茂樹 （副査） 教　授　角道　正佳　　教　授　岸田　文隆　　教　授　藪　　司郎 大阪外国語大学名誉教授　橋本　　勝

論文内容の要旨

反義語は世界の全ての言語に存在している普遍的要素である。反義語は意味論の重要な位置を占めており、古今東西の学者に研究されてきた。モンゴル言語学における意味論の研究は未発達で、モンゴル語意味論の中でも反義語研究は特に不十分である。これまで、モンゴル語における反義語の研究は詳しくなされておらず、まだ氷山の一角しか見えていないと言える。これは意味論の複雑性、多様性、抽象性などの客観的な原因とモンゴル語研究者達がモンゴル語における反義語に対して研究を見落としてきたことと関係があると考えられる。しかし、客観的原因より主観的原因のほうが大きいと思われる。「反義語は、意味論の本でしばしば無視され、辞書のなかに席を通常与えられていないのは、驚くべきことである」。そこで私は、先行研究の成果を活用しつつ、モンゴル語の反義語を総合的に、体系的に研究することを目指している。本研究課題は、論文編と辞典編の二つの部分から構成されている。

研究論文の内容は、「はじめに」、「第一章」、「第二章」、「第三章」、「第四章」、「第五章」、「第六章」、「おわりに」という8つの部分から構成される。「はじめに」では、この研究論文の構成と内容を簡単に紹介する。「第一章」では、課題を選択した理由を述べ、さらに課題の範囲、研究方法に言及する。「第二章」では、モンゴル語における反義語の研究現状について述べる。「第三章」では、モンゴル語の反義語の特徴、すなわち、意味的特徴、構造的特徴、民族的特徴を分析する。「第四章」では、モンゴル語における反義語の分類、すなわち、オトハラソ（udqalasu）による分類、品詞による分類、移動的な意味による分類を行う。「第五章」では、モンゴル語の反義語研究に存在している意義深い問題について分析する。「第六章」では、モンゴル語の反義語の役割について述べる。「おわりに」では、以上述べた内容をまとめると同時に本論の独創性と発展性についてまとめて述べる。

本論の科学的及び学術的価値を高めるため、モンゴル語における反義語を収集し、辞典として編纂する。これまで、モンゴル語に関する様々な辞典が出版されており、成果を得てきた。学生向けのモンゴル語反義語小辞書が出版されてきたが、学術研究向けのモンゴル語反義語辞典は出版されていない。したがって、学術向けのモンゴル語反義語辞典を編纂する必要がある。これが、辞典編のことである。

この研究課題の中では、論文編は理論的なものであり、辞典編は実践的なものである。理論と実践の両面から研究を行うことで、モンゴル語における反義語研究がより詳しくより深いものになると大きいに期待できる。

研究論文として、本論の独創性と発展性についてまとめ、簡単に述べようと思う。実際、これは、この研究課題にはモンゴル語における反義語について、いったい何を書き、どれくらいまで分析したかという質問に対する答えである。

独創性について：

１．本論は、初めて統計方法を使用してモンゴル語の反義語について研究しており、さらにモンゴル語の反義語研究の大きな間違い、つまりモンゴル語では形容詞反義語の数量が最も多くという結論を訂正して、動詞反義語が最も多いという結論を提出した。

２．本論は、初めて構成分析の方法を使用して、モンゴル語における単語反義語を分析しており、さらにモンゴル語における単語反義語の構造的モデルを明らかにした。

３．本論は、モンゴル語における反義語の見落とされた研究対象である連語反義語を詳しく分析しており、さらに連語反義語の構造的モデルを明らかにした。

４．本論は、初めてモンゴル語の反義語における対等性について体系的分析を行っており、さらに対等性はモンゴル語の反義語であるか否ないかを検証する基準であるという意見を提唱してきた。

５．本論は、初めてモンゴル語における反義語の意義深さについて例示しながら分析し、こういう研究を注意しなければならないという意見を示した。

６．本論は、初めてモンゴル語における反義語の多様性について例示した。この特徴は理解しにくいが、モンゴル語における反義語の重要な特徴である。

７．初めてモンゴル語の学術向けのモンゴル語反義語辞典を編集し、しかも、モンゴル語の単語反義語や連語反義語を合わせた最初のモンゴル語反義語辞典である。これは、モンゴル語における意味論だけではなく、辞典学の研究にも役立つであろう。

発展性について：

１．モンゴル語の品詞における反義語研究について、以前は名詞類の反義語と動詞類の反義語のみ研究されており、本論は名詞類の反義語と動詞類の反義語だけではなく、不変化詞類の反義語も研究した。また、名詞類の反義語と動詞類の反義語の特徴についてもできる限り分析した。

２．モンゴル語の反義語の概念について、以前の説明した概念の欠点を分析して、対等性に一致する語が反義語であるという観点を提唱した。

３．モンゴル語の反義語と類義語の相互関係について、過去の分析を基に、その研究を図式化して、さらに反義語と類義語の相互関係によっていくつかの反義語を形成するかの数量計算の公式を提出した。

４．モンゴル語の過渡的意味による分類について、以前の説明したことを基に、両極反義語と相補反義語の概念と特徴について図式化して説明した。これは、この二種類の反義語の区別や特徴について理解しやすくするだろう。

５．モンゴル語の反義語の役割について、以前は反義語の使用の役割について簡単に説明してきた。本論は、モンゴル語の反義語の使用の役割だけではなく、形成の役割、教育の役割、辞典編纂の役割についてなるべく詳しく分析して説明した。

６．モンゴル語の反義語の例において誤っている点について訂正しており、更にその誤っている理由を分析した。以前は、主にモンゴル語における反義語の対等性について言及されなかったので、色々な間違いが出てきた。

７．モンゴル語における反義語のオトハラソ(udqalasu)による分類について、以前の分類は以下の通りである。

- 一つのオトハラソにおける反義語
  - 一つのオトハラソにおける一つの反義
  - 一つのオトハラソにおける複数の反義語

本論のオトハラソによる分類は以下の通りである。

- 反義語
  - 一つのオトハラソにおける反義語
    - 一つのオトハラソにおける一つの反義語
    - 一つのオトハラソにおける複数の反義語
  - 複数のオトハラソにおける反義語
    - 一つの語の複数のオトハラソにおける反義語
    - 反義語の複数のオトハラソにおける反義語

モンゴル語の反義語研究はモンゴル語の意味論において困難で、複雑な課題である。そのため、意味論の中で研究成果が少ない、進展が遅い分野である。本論では、筆者は新しい方法を用いて、新しい角度と視点からモンゴル語における反義語研究について体系的、詳細に分析することを目指して努めてきた。当然のことながら、本論でモンゴル語における反義語研究の全ての問題について百パーセント解決することはできないのである。今後も引き続き、モンゴル語における反義語研究について努力しようと思っている。

論文審査の結果の要旨

＜本論文の目的＞

現代モンゴル語における反義語研究は、意味論研究の中でも、従来研究が立ち遅れている分野の一つであり、今回その分野に深く分け入り、とりわけ反義語の意味的及び構造的特徴から考察を加え、モンゴル語の反義語全体の構造を体系的に明らかにするとともに、論文編に加え、辞書編を完成させることで、理論と実践の両方からモンゴル語反義語研究を深めることを目的としている。

＜先行研究＞

1964年に発表されたB.リンチンの「モンゴル語の反義語について」という研究論文から現在に至るまで、20編ほどの反義語に関する研究論文が発表されているが、そのうち8編が筆者によるものであり、筆者はこれまで一貫してモンゴル語の反義語研究者の一人として活躍してきた。とりわけ、反義語の基準に対する考えが研究者によって異なっていた点、従来の研究が「単語反義語」だけに偏っていた点、及び学術的な反義語辞典が皆無だった点等、いくつかの欠点を補った意味で、本論文は価値の高いものである。

＜本論文で明らかにしたこと＞

1. モンゴル語で反義語であるか否かを検証する最も重要な基準がその対等性にあるという考えを一貫して主張し、その客観的基準によって、従来の反義語に対する誤った見解を是正した。

2. モンゴル語の「単語反義語」と従来全く扱われなかった「連語反義語」の双方を詳細に分析し、それらの構造的モデルを明確に提示した。

3. 従来の反義語研究で出された「モンゴル語の反義語は、形容詞反義語が数的に最も多い」という結論を是正し、動詞反義語が最も多いということを統計的に初めて明らかにした。

4. モンゴル語における反義語の意義と多様性について、具体的に例示しながら詳細に体系的に示した。

5. 論文編に加え、辞書編として、モンゴル語における初の本格的な学術的レベルの、しかも単語反義語のみならず連語反義語を含めた「モンゴル語の反義語辞典」を編集し完成させた。

＜総評＞

筆者は、本博士論文提出以前からも、本国ですでにモンゴル語反義語研究に関する一連の優れた研究論文を発表してきており、今回はその集大成として辞書編とともに完成させたものであり、学術的に博士（言語文化学）の学位授与にふさわしい一定の水準に達したものと、五名の審査委員が全員一致で判断した。